日本記号学会第 43 回大会個人研究発表・要旨

2023 年 6 月 17・18 日
東海大学・品川キャンパス

近代日本におけるナショナリズムの象徴としての山岳
―日本占領下の台湾の玉山の事例から―

山田 志歩（大阪大学大学院）

近代において、志賀重昂が『日本風景論』(1894)にて火山を国粋として論じたことに始まり、ナショナリズムの文脈で山岳に意味が付与され利用されるようになった。志賀は、日本最高峰の富士山に形状が類似した各地の火山を「〇〇富士」と紹介した。日本が台湾や中国を領有した暁には、それぞれ玉山を台湾富士、泰山を山東富士と改名するべきだとも述べている。前田(2006)は、志賀が国威伸張のシンボルとして富士山を扱ったと指摘している。従来の研究では富士山表象の変遷が注目されてきた(エアハート 2019)。しかし、『日本風景論』は富士山のみを国粋と謳うわけではなく、美しい円錐形の日本の火山全体に独自性を見出す書である。また、アジア侵略を進める近代西洋への対抗心が、本書内での日本と西洋の火山の比較に表れていることは、発表者が既に指摘したところである(山田 2023)。志賀は日本の火山に、国粋、南進論、西洋への対抗意識といったナショナリズム的な多義を持たせたと思われる。

本発表においては、富士山以外の山岳の事例に視野を広げ、『日本風景論』後に山岳が如何なる意味づけをされ利用されてきたか考察する。近代日本において山岳がシンボルとしてどのような役割を果たしたのか、また日本人のアイデンティティの一部として如何に機能したのか紐解く。本発表では、日本占領下の台湾の玉山を巡る動向に焦点を当てて分析を進める。実のところ玉山は火山ではなく、また富士山のような円錐形をしているわけでもない。富士山よりも標高の高い新しい最高峰となった玉山が、近代日本のナショナリズムに基づいた火山賛美の思想に巻き込まれる経緯を考察することで、日本人が山岳に与えてきた意味を改めて正確に把握できる。その際、志賀が火山に持たせた重層的な意味との連続性を検証する。併せて、日本人の共有する山岳の意味が如何なる形で植民地へと波及したのか分析し、日本が植民地の思想を支配していく過程を明らかにする。

参考文献

前田愛(2006)『幻景の明治』岩波書店
山田志歩(2023)「志賀重昂『日本風景論』における剽窃と引用―国粋主義と西洋を志向する近代化の葛藤―」『第 7 回若手研究者フォーラム要旨集』大阪大学大学院人文学研究科
H・バイロン・エアハート(2019)『富士山―信仰と表象の文化史』慶應義塾大学出版会